姫の気まぐれ

水銀。杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫の気まぐれ

【Ｎコード】
Ｎ２４８８Ｚ

【作者名】
水銀。杏

【あらすじ】
天皇の娘の暗殺を命じられた執事。だが殺せない。理由はただ一つ。（過去に連載して消した作品のリメイクです）

プロローグ（前書き）

あらすじにも書いたように、これはリメイクしたものです。
詳しくは後書きに書きますので、『プロローグ』をどうぞ！

プロローグ

俺の前に出されたのは、一人の少女の写真。
作り笑いのような表情で、人をバカにしているようだ。
「知ってるよな？天皇の一人娘だ」
ボスは小型の拳銃と、弾が３つを俺にくれた。

「これで、この娘を殺してこい」

それが俺の命令。
暗殺でも、近づいて殺してもいい。
日本国民はこの娘にうんざりしていた。
１５歳になるのに、まともな躾はされておらず、
国宝を拝見するときにも常に騒いだり、暴言を吐いたり、
顔とのギャップが激しい生意気な小娘だった。
天皇も天皇で、注意することなく笑っており、後に謝罪することもない。
かといって、この娘が死んだところで日本が変化するわけでもないのは確か。
この出来事で、天皇一族が崩壊すればいいのだ。
俺はボスに拾われた身。命令は必ず実行する。

「もし接近するなら、コイツに頼め」
メモ用紙に携帯番号。
現在天皇のとこで護衛をやってる仲間だ。
数回会ったことがあるか、助けになるかもしれない。
俺は娘に近づきことにした。
銃で撃つなど、バレるようなことはしたくない。
寝ているとこを狙ってやろう。その方が楽な気がする。

「もしもし…ボスから頼まれたんだが――――」

数日後

俺は上手く接近することが出来た。それは、

「今日からお嬢様の執事を務めさせてもらいます。…モカと申します」

執事。性に合わないと思ったが、天皇が勝手に抜擢した。

黒いスーツを着て、この娘の世話をすることになった俺。モカは適当に決めた名だ。

「変わった名前ね。…私は、澪(みお)よ。

“姫”って呼んでちょうだい」

「…かしこまりました。姫」

これが、俺と姫との出会いだった。

プロローグ（後書き）

次話⇒１１日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

１話目は明日ですが、それ以降は3日おきぐらいになると思います。
Ｒ１５ということで、２１時投稿で行きます。

1・私を敬いなさい（前書き）

一話目スタートです。
あ、完璧に女性向けの作品です。

1・私を敬いなさい

１５歳の姫
２１歳の執事
部屋でずっと二人っきり

「モカ、お腹が空いたから何か持ってきて」
「はい」
基本的にベッドの上で過ごす姫。
学校に行く時間なのに、服に着替えようともしない。
ピンクのフリルのネグリジェが可愛らしいが、数日間も見てるといい加減飽きる。
よそから見たら、美形なお嬢様だが…。
「サンドイッチです」
「置いといてー」
俺を見ようともしない。近くにあるテーブルを指差し、読書を始めた。
テーブルにサンドイッチを置き、その側で立つ。
執事の仕事は面倒だが、休憩が多いバイトみたいな感じだ。
食事や掃除の時間以外は、こうして立ってるだけでいい。
姫からの命令があるまでは。
「父上様がおっしゃってましたよ。学校に行かないのかと…」
「モカは私だけの執事でしょ？私の言うことだけ聞けばいいの」
突然俺に話しかけられた衝動で、サンドイッチを頬張る。

「モカが来る前に、年配の執事がきたわ」
食後の紅茶を飲みながら、姫は続けた。
「身の回りのことは言わなくても全部してくれたわ。
でも、ものすごくしつこかった。家の財産とか聞いてきて…」

「…」
「知らないって言っても聞いてきたの。だから辞めさせたわ」
「そんなことが…」
カップが空になると、紅茶を注ぐ。
「モカも聞いてきたら、…」
「姫が嫌がることは聞きませんよ」
「…そう」
紅茶を一口飲むと、姫が俺にアイコンタクトをする。
もういらないっていう合図だ。
トレイごと部屋から出す。再び部屋に戻ると、
姫はまたベッドの上で横になっていた。

「なんで執事になったの？金目当て？」
「…私は金で雇われたわけではありません。
ただ姫の守るために…」
「悪趣味」
「なんとでも」
笑いながら姫が俺に枕を投げる。
それを受け取ると、元の位置に戻す。
自動的に、姫の顔が俺に近づく。
「もし立場が逆だったら、襲ってたわよ？」
「そうですね」
お互い口だけ笑うと、唇を重ねる。
別に恋仲になったわけじゃない。
姫は気にいった人にキスをするらしい。
まぁ、俺が初めてみたいだが。

すぐ殺せる。
いつでも殺せる。
俺の頭の中では、それを抑えるので精一杯だった。

１・私を敬いなさい（後書き）

次話⇒１４日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

2・私の言うことだけでいいの（前書き）

どうぞ！

2・私の言うことだけでいいの

「モカ君、澪に学校に行くように言ってくれないか？」
「最善を尽くしておりますが…」
「せめて勉強はしてくれればいい。…では、頼むぞ」
「いってらっしゃいませ」
姫のお父様である、天皇陛下。
今日から一週間、アメリカの皇太子への挨拶、王室の訪問をするらしい。
見送ると、誰かに呼ばれてるような気がした。

「遅い！」
「申し訳ありません」
俺の勘は当たっていた。
ベッドの上で横になりながら足をバタつかせ、俺の事を睨みつける。
「お父さん、なんか言ってた？」
「…学校には行きたくないですよね？」
「うん」
即答で返す姫。
用意しておいた朝食はもう食べ終わっていて、特にやることがないのか、
ネグリジェのままで起き上がろうとしない。
机に置いてある教科書も、読むどころか見ることなく…。
陛下が困るのも分かるが、甘やかしたのはそっちだと思うんだが。
「モカは私の執事だから、お父さんと話す必要ないわ。
この部屋から出なくてもいいし」
「縛られるのは嫌いですよ？」
「…私の執事になる条件よ？」
俺が姫が寝ている横に座ると、少しだけ嬉しそうな顔をした。

「なんで学校が嫌なんですか？友達がいるでしょう？」
「友達はいない。周りに男子が寄ってきて気持ち悪いの」
姫が通っている学校は、大手会社の跡継ぎや令嬢などの集まりだ。
もちろんのこと、姫と結ばれた男子は天皇一族の仲間入り。
自然と注目の的になるのは仕方ないことだが。
「無礼な奴は懲らしめないとですね」
「モカが同級生だったらいいのになー」

「モカは勉強できるの？」
「ある程度のことしか…」
モカは捨て子であり、まともに義務教育を受けていない。
人殺しの世界に入った時に少しだけ勉強したぐらいだ。
「一緒に勉強する？」
「したら、学校に行ってくれます？」
「それとは別。私が何もしなかったら、モカの評価が下がるでしょ？
学校は、モカも行ってくれるなら行くわ」
姫の腕を引っ張り、体を起させる。
俺が触れると、姫は何故か素直に言うことを聞いてくれる姫。
自然と俺の胸元に姫の顔を当たる。
「モカのココは温かいから好き」
「はい」
「一週間勉強してやりましょ？お父さんを見返すの」
「はい」
俺は姫の頭を撫で、見えないように面倒臭そうな顔をした。

2・私の言うことだけでいいの（後書き）

次話⇒１６日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

３・私はあなたが嫌い（前書き）

そろそろ１５禁の内容を出せたらいいのになー

3・私はあなたが嫌い

「勝手に部屋に入らないでよ！」
「ですが澪様、陛下に頼まれてまして…」
掃除をしようと部屋に入ってきたメイドを怒る姫。
「掃除ぐらいモカがやってくれるわ！どっか行って！」

はぁ…

「澪様！何をするんですか！？」
バイオリンのレッスン中、いきなり弓を床に叩きつける姫。
「つまらないの！もうやらない！」
「陛下が…」
「バイオリンも華道も茶道も、モカが一緒にやってくれないなら、私やらない！」

いやいやいや

「なんで一緒に洗濯するのよ！？別にしてって言ったでしょ？」
「申し訳ありません！私のミスです…」
陛下の服と一緒に自分の服も洗濯され、お怒りの姫。
「あんたみたいなバカメイドじゃなくて、モカがっ」
「分かりましたから姫、部屋に戻りましょう」
これ以上メイドたちが怒られるのを見てられない俺は、姫を背負い、部屋に戻す。
基本姫が家の中を移動するときは、俺がおんぶする感じになっている。
「すみません、モカさん」
「いえ、他の業務をよろしくお願いします」

部屋に着くと、ベッドに飛び込む姫。
「さて、勉強しましょうか？」
「モカも一緒？」
「先に洗濯を済ませてきますね」
「帰ってくるまでやらないわよ？」
「…結構です」
部屋を出ると、一気に疲れが出た。
今、陛下はアメリカに行っているが、姫を心配する電話が頻繁に掛かってくる。
何をしているんだ？とか、勉強はちゃんとしているのか？とか…。
過保護というか、全てをメイドや俺にまかせないでほしい。
自分の娘ぐらい、自分で面倒を見たらどうなんだ？

部屋に戻り、姫の命令で勉強を付き合うことに。
「モカ、この問題にはこの数式を使うのよ」
「姫は頭が冴えてますね」
「当り前よ」
俺がいるだけで、姫の勉強がはかどる。
この数日で、学校から出された宿題が終わりそうだった。
「姫、この調子で終わらせましょう」
「…なんかご褒美くれる？」
「？」
「覚悟しといてね」
姫は俺に笑いかけると、宿題を続けた。

３・私はあなたが嫌い（後書き）

次話⇒１８日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

４・私が一番でしょ？（前書き）

エロいシーンが書けたらいいのになー（遠い目）

4・私が一番でしょ？

姫は俺の事が好きなのかもしれない。
そう理解した。

宿題が終わったらのご褒美は、
俺と関係を持つということ。
もちろん、そんなことはご法度だ。
陛下やこの屋敷にいる人にいるものにバレたら、完璧にクビになるだろう。
しかも、俺は姫を殺すために忍び込んでいる身なのに…。

「モカが私のことを全部やってくれれば、メイドは部屋に入ってこない。
ずっと二人っきりになれるわ」
「そんなに私のことが好きなんですね？」
「うん。執事として」
いきなり抱きしめられても、俺にしては慣れきったことだ。
不意にしてくるキスも。

「モカ、明日になったらお父さんが帰ってくるから、今日は一緒に寝ましょ？」
「昨日添い寝しましたけど？」
「そうだけど…」
「…添い寝だけでは足りませんか？」
「うん…」
体の関係も。
過去に他の人殺し一家に潜りこんだ時、
そいつらに監禁されてた女を抱いたことがある。

好意でじゃない。頼まれたから抱いた。嫌で仕方なかった。
なのに、姫のことは好きというわけでもないのに、別に嫌ではない。
心なしか喜んでいる俺がいた。

夜、姫が眠りに就くと部屋を出た。
ボスから電話が入っていたのだ。
「なんでしょうか？」
『まだ殺すことはできないのか？』
ボスの声は冷静だが、怒りがこもっている気がした。
「やっと俺に懐いてきたんです。殺すのは時間の問題です」
ボスは小さく息を吐くと、電話を切った。
自分の部屋に行く通路で、
「…結城さん」
同じ人殺しである、先輩の結城さんに会った。
今は護衛をしているが、本当は姫を殺すように頼まれた方だ。
姫に気にいってもらえず、入ったその日に執事から護衛になった。
常に悪人面で、他の護衛やメイドから恐れられている。
「お嬢様は優しいか？」
「ええ、毎日ハードで」
「ここで話すのもアレだからな、部屋に行くぞ」
場所を俺の部屋に移した。

「陛下はお前以外の執事を雇う気はないようだ」
「…」
「殺すなら早く殺せ。いい加減にやって途中で投げらされても困る」
結城さんは俺に銃口を向けた。
俺が姫を殺すことが出来なかったら、この人が代わりに殺すんだろうな。
「俺が執事を辞めるって言ったら、姫は柱にでも俺を縛りつけるでしょうね」

「相当惚れられてるんだな、お前は」

「束縛されるのは嫌ですけどね」

４・私が一番でしょ？（後書き）

次話⇒２０日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。
２３・２４・２５日は更新を休みます。

5・私の虜（前書き）

某ドラマの名残りで、
モカのモデルは向井理君でお願いします↑

5・私の虜

陛下が帰ってきてから、余計俺に懐いてきた。
だが、今日は珍しく、

「姫、学校に行かれるのですか？」
「そうよ、モカ送ってくれる？」
久しぶりに姫の制服姿を見た。
授業を受けに行くのではなく、宿題を出しに行くだけらしいが。
「行ってきますのチューは？」
「さっきしました」
「あれは、おはようのチューでしょ？」
姫を学校まで送ると、戻るまで裏門で待つことにした。
しかし、宿題を出すというだけなのに、小1時間待たされた。
姫は家に帰るなり、陛下の部屋へ行った。
入室は許されず、姫の部屋で待機することに。
数分後…。姫は部屋に戻り、ソファーに座る。

「何の話をされてたんですか？」
「んーと、私ね、婚約者がいるんだって」
俺は目を丸くして驚いた。
姫が学校に行ってない間、陛下と学校側で勝手に決めたらしい。
お相手は大手財閥の御曹司であり、姫と同じクラスの方で、
学力もトップをキープし、容姿も申し分ないとか。
姫がなかなか戻ってこなかったのは、そのお相手と話をしたようで。
「なんかね、あっちは私と結婚してもいいんだって」
「そうですか……！」
軽く流すと、姫がクッションを投げてきた。
「なんとも思わないの？彼女が他の男と結婚しようとしてるのに？」

「仮に付き合っていたとしても、私は姫の婚約者じゃありませんよ？」
視界に入ってくる涙目が、憎らしく思う。
自分に当たったクッションを元の位置に戻すと、姫は俺の腕を掴む。
「キスしたら恋人ですか？体を重ねたら結婚できますか？」
「…」
「お互いが望まない限り、妄想のままです」
「……よくわからない」
姫に腕を引っ張られ、横に座る形になった。
「モカが、私を好きになってくれるまで待つわ。
だから、お父さんに今回の話は無しって伝えてきて」
「そういうのは姫が直接言うものだと思いますが？」
「だったら、私たちが付き合ってるって言うわよ？」
「…二度手間ですね」
立ちあがり、部屋を出る。姫もついてきた。
陛下の部屋は、姫の部屋がある屋敷から離れており、
そこまでの通路は基本的にメイドと俺しか通らない。
姫は誰もいないことを確認し、俺と腕を組んできた。
目が合い、微笑みかけてくる。
「私の言うこと聞いてくれれば良いんだけど…」
「…姫」
「ん？」
「いつか私にも、姫を惜しむ時がくると思います」
「…？。ありがと」
俺に、人を愛する気持ちがあれば。

5・私の虜（後書き）

次話⇒２２日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

6・私だけを見て？（前書き）

姫はスケスケのパンツを履いてます。モカ君のために。

6・私だけを見て？

姫の婚約話は破棄されたが、毎日学校に行くように説得された。
それだけでは嫌なのか、俺も一緒に学校に行くという条件で承諾した。

「朝ですよ、姫」
「んー」
「学校に行くんでしょ？」
「あと5分…」
「じゃあ5分後に起こしますね」
…姫が簡単に起きてくれるはずもなく、
「もう昼ですよ」
「…」
もう正午を過ぎていた。
結局この日は学校を休み、昼食を食べた。
姫は出された宿題をやることになり、
俺は姫が着ていたネグリジェを洗濯しに部屋を出た。
数分後、部屋に戻ろうとすると、ドアの前が騒がしかった。
「何様なの？私はモカ以外が淹れたお茶は飲まないって言ってるでしょ？」
「あの…陛下のお土産ということで…」
「余計いらないわ！どっか行って！」
姫とメイドが喧嘩をしていた。
ドアを閉められ、立ちつくすメイド。見たことない顔だ…新人か？
「すみません。…姫が何かしましたか？」
「いえ、大丈夫です」
俺の顔を見ることなく、そのメイドを去って行った。
部屋に入ると、不貞腐れながら勉強を続ける姫。

「すぐにメイドをいじめるのをやめてください」
「モカが遅いのが悪いのよ」
お茶を淹れ、姫の宿題に付き合う。最中に、結城さんからメールがきた。
内容は『お嬢様が寝たら部屋に来い』…と。

「遅かったな」
「姫の夜の相手もしなくちゃいけないんでね」
「…まぁ、座れよ。もうすぐ客人が来るからな」
ソファーに座ると同時に、ドアが開いた。
「あ」
入ってきたのは、昼間のメイドだった。
俺を睨み、真向かいのソファーに座る。
「モカさんのことはボスから聞いてます」
「…あなたは、仲間ですか？」
「ええ」
「モカ、この女の名前は島田。
陛下を殺すようにボスから頼まれた殺し屋だ」
「！？？」

島田はまだ仕事があるらしく、早々に部屋を出て行った。
それからは結城さんから聞いた話。
あいつは俺と一緒で、ボスに拾われた身であり、命令にも忠実に答える女であった。
年齢は俺と変わらず、正直、顔とスタイルは完璧だ。
そのこともあってか、男性をターゲットにすることが多かったらしい。
そして、衝撃なことを聞いてしまった。
「島田って女、自分が殺す男に恋しちまってな、孕みやがった。
んで、自分の腹を切って赤ちゃんを殺したんだ」

何故か俺は、子を孕む姫を想像してしまった。

6・私だけを見て？（後書き）

次話⇒２６日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

7・私は誰よりも素敵（前書き）

ドロドロしたのが書きたいですね。
後書きにちょっとした予告があります。

7・私は誰よりも素敵

「島田は自分の子を殺したんだ。人を殺すのに罪悪感なんてない。
陛下が殺されるのも時間の問題かもな」
話が終わり、自分の部屋に帰る。シャワーを浴び、身をベッドに預けた。
島田の過去を聞いて、萎えるほどのだるさを覚えた。
ターゲットと殺し屋が結ばれる訳がない。
ボスにそのことがバレたら、中絶するなどの処置を行うしかない。
中絶しなかったってことは、ある程度子は育ってたのだろう。
そして自分の腹を切った。大量出血でもして、手術はしたはずだ。
島田はもう孕む体じゃないな…そういうのって女はどんな気持ちなんだ？
姫がもし俺と…。

次の日の朝
姫を学校に送り、俺は用意された別室に行く。
授業に参加できない俺は、この部屋で待機することになる。
休み時間になると姫がやってくる仕組みだ。
授業終了のチャイムが鳴ったと同時に、
「モカー」
姫が入ってきた。
「ん…ふっ」
両手で俺の頬を包み、キスをする。
「授業は面倒だわ。モカがやればいいのに」
そう言いながら俺のネクタイを解いた。
「…姫、休み時間は１０分しかありませんよ？」
「１０分もあるじゃない？」
誘いに断ることも出来ず、

俺が姫の腰を引き寄せようとした時、
「澪様！次は移動教室なので…！？」
「きゃっ！」
次の授業の担当の先生がドアを開けた。
先生は唖然としていたが、姫は何事もなく教室を出る。
俺はネクタイを絞め直し、気だるさを実感した。

６時間目の授業が始まるチャイムが響く。
これが終われば帰れるのだが…。携帯が鳴った。
「…もしもし？」
『モカか？今どこにいる？』
結城さんだ。焦っているようで…。
『陛下が…倒れた！』
「！！」
俺は車を出し、屋敷へと向かう。

門には救急車が停まっており、
陛下が運ばれていくのが分かった。
遠くにいる結城さんを見つける。
「何があったんですか？」
「お茶飲んでるときにいきなり倒れてな…まだ意識はある」
「まさか、島田のせいですか？」
「いや、あいつは非番だ」
結城さんは俺に１枚の写真を見せる。
ちょっと古い写真だが、俺と同じ歳ぐらいの男が写っていて、
礼儀正しくスーツを着こなし、にこやかに笑っている。

「こいつは６年前、お嬢様の執事をしていたやつだ。
今日から補助の執事として、朝来たんだが…。怪しいと思わないか？」

7・私は誰よりも素敵（後書き）

次話⇒２７日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

８話にて、今年の投稿をストップします。

8・私を愛してくれた人（前書き）

途中から新キャラの神谷視点になります。
神谷のモデルは伊勢谷友介さんでｗｗｗｗ
青年萌えｗｗｗｗｗ
後書きに予告あり。

8・私を愛してくれた人

神谷　仁(じん)。
6年前に姫の執事を半年ほど務めていた男。
用があってロスに行ったらしいのだが…。

俺は結城さんの話を聞いた後、学校に戻り、姫を迎えに行く。
車内で陛下が倒れたことを言ったが、
「死んだの？」
「いえ、今は気絶したということで…」
そう言うと、他人事かのように返答しなかった。
表情から見ると、心配はしてないようだ。
姫は早々と部屋に入り、俺はそれを追う。
すると、後ろから俺を呼ぶ声がした。振り返ると、
「モカ君だよね？」
神谷さんだ。

俺の部屋に移ることにした。
「懐かしいね。この家も空気も」
「…」
「僕がモカ君ぐらいの時に姫様の執事をやっていてね。
もう三十路だ…。おっさんだと思われるかな？」
ソファーを叩きながら笑う神谷。
結城さんよりも年上で、なんか緊張した。
それより神谷さんが…、
「さっき門のとこで姫様を見かけたんだが…やっぱ綺麗になってる」
姫を好きだということ。
デキる男って感じで、かっこよくて。
素人の俺なんかよりも、ちゃんと執事としての教育を受けていて…。

そんな男が、１０歳のときの姫に恋をしたのだ。
別に神谷さんの片思いってことで終わったのだが、
「今も好きでね、この６年間、姫様以外の女を愛することができなかったよ」
１０歳の姫に手を出すことが出来ず、ロスに飛び立った。
だが、半年も務めていたのは長い方だ。姫に気に入られてたのは確か。
もしロスに行かなかったら、今でもやってたかもしれない。
現在の積極的な姫を見たら驚くだろうな。
「君は相当気に入られてるんだって？他のメイドから聞いたよ」
「…ええ、おかげさまで」
神谷さんが口だけ笑うと、俺もそのまま返した。
「お願いがあるんだが、残りの業務は僕がやっていいかな？」
「え？」
「実際は補助だが、姫様に僕のことを思い出してほしいんだ」
あとの業務っていっても、夕食と入浴の準備だけ。
姫が神谷さんでいいというなら…、
「いいですよ。今日だけ」

ガチャ
「姫様！」
「誰？……仁？…仁ね！」
姫様は僕に抱きつき、額にキスをした。
これが、昔の僕たちの挨拶。
「なんで帰って来たの？」
「姫様に会いたくなったからですよ？」
「変なこと言うのね！…モカは？」
「休んでもらってます。夜まで、僕が姫様の相手をします」
「…まぁいいわ。ねぇ、勉強教えてくれる？
あと、お腹空いたから夕食は早めにして」

「…分かりました！」
僕のそばにいる姫様はいい香りがして、懐かしい。
間違って触れたら、壊してしまいそうになる。それほど愛おしいんだ。
勉強を済ませ、夕食をとり、お風呂に入る。
ベッドに横になる姫様。ここで業務は終わりだが…、
「モカ呼んできて！モカの腕枕じゃないと寝れないの！」
「はい？」
「はーやーく！」
「…」
僕はそれを無視して、ベッドに座り、
「…え」
姫様に覆い被さる。
「姫様はもう大人の女だ。だから、
僕が大人のやり方を教えてあげます」

8・私を愛してくれた人（後書き）

次話⇒来年1月4日（21時）
感想・誤字等受け付けます。
番外編（完璧R15予定）⇒来年1月5日（21時）

9・私を愛してくれる人（前書き）

あけましておめでとうございます。
今回はオール神谷視点ですが、
次話からモカ君に戻ります。

9・私を愛してくれる人

数センチでも動かしたら、唇が重なるだろう…そんな距離まで近づいた。
姫様を俺をまっすぐ見るだけで、抵抗はしなかった。
「姫さ――」
「モカを呼んできて」
僕の存在を拒む口調だった。
だが体勢を変えることなく迫る。
「そんなにモカ君が好きですか？」
「ええ」
「愛しあってるんですか？」
「ええ」
僕は姫様の額にキスをし、おやすみと言って部屋を出た。

昔、姫様の執事を務めていたときに聞いたことがある。
『人の愛し方、愛され方が分からない。だから、一途に人を愛することしかできない』
姫様はたとえ相手が自分のことを好きじゃなくても、
相手が自分を好きになってくれるように一途になる。
姫様は魅力的だ。その気がなくても、一緒にいれば好きになっていく。
モカ君にも同じことをして、本気に好きなったんだ。
（多分、モカ君がいなくなるまで…ん？）
部屋に戻ろう廊下を歩いていると、モカ君の部屋の前で1人のメイドが立っていた。
「どうかしたんですか？」
「！！？…いや、」
名前は不明だが、まだ若い女性だ。

「モカさんに、ちょっと話があって、
とりあえず戻ってくるまで待ってようと思って」
「戻ってくる？」
「いつもなら澪様のところにいる時間だし」
そうか…。僕が執事を交代してるのを知らないのか。
「部屋にいると思いますよ」
「？」
ガチャッ
「…？」
気付いたのか、モカ君が出てきた。
「なんですか？」
「モカさん…ちょっと話が」
「…神谷さん、姫は寝ましたか？」
「寝たよ。君を欲しがっていたさ」
「…そうですか」
モカ君は曖昧に返すと、メイドを部屋に入れ、ドアを閉めた。
姫様のとこに行こうともしないのか…。
というか、あのメイドとはどういう関係なんだ？
部屋に戻り、良い事を考えた。

起床時間より早めに部屋に入り、姫様を起こした。
「……モカは？」
眠い目を擦りながら僕を見る。
朝日が眩しく、枕に顔を埋めた。
着替えをソファーに置き、紅茶を淹れる。
「モカ君なら、メイドさんと一緒にいますよ」
「！？」
姫様を手に入れるなら、嘘を作り、固めてやろう。

「詳しく、聞きたいですか？」

9・私を愛してくれる人（後書き）

次話⇒８日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

番外編（予定）⇒６日（２２時）
新連載⇒１月下旬（詳細は後日）

番外編・初めての夜（前書き）

（物語の進行にあまり関係ありませんので、時間がある人は読んで下さい）
姫視点の番外編です。
サブタイトルどおり下ネタ回です。
作中では書くことが出来なかったので…。
Ｒ１５なので、本番は書いてませんｗｗｗ
いつもモカ君視点なので、姫の思いを書くのは新鮮ですね。

番外編・初めての夜

そっと服を脱がして
そっと肌を撫でて
そっと耳元で
私に好きって言って

モカがネクタイを取り、胸元までボタンを外す。
見える鎖骨がしっかりしていて、恥ずかしくなった。
いつものように抱きしめると、モカの吐息が私の首筋や耳にかかって、くすぐったい。
私が笑うと、リップ音を立てながらキスをしていく。
跡が残らないように、私を楽しませるように。
私はもう下着姿だった。少し手を出したら、全てが露わになってしまう。
モカをそれに手を出さず、胸元やお腹、足にキスをする。
目を瞑っていて、モカが見れない。恥ずかしくて堪らないから。
「――」
モカが私の名前を呼び、反応した瞬間、唇が重なった。
最初は当てるだけで、それを繰り返した。
モカが私の唇を舐め、自然と口が開き、舌が入ってくる。
生温かいモカの匂いが口の中に広がっていく。
心地よくて、溶けそうになる。涎が垂れてもお構いなく続けた。
呼吸がしづらくなり、透明な糸をひきながら離す。
「…モカ」
再び軽くキスすると、私に覆い被さった。

初めては、好きな人とがいい。
そんなこと願望したのはいつだったか…。
まだ１６歳だから子供に見えるかも知れない。
でも私はわがままだから、あなたを捨てるかも知れない。
だけど、あなたが好き。あなたと一つになりたい。
そっちの思いが強くなって…。

乱れた呼吸を整えると、モカが私の頬にキスをした。
優しくて、あっという間だった。
でも、１番近くにいることができた。
「初めてなのに…血、出ないのね」
「相手によりますよ」
「…？」
「相性が良かったってことです」
笑いあって、抱きしめて。

別にこれが最後じゃないし、
また重なり合うことが出来る。
私のことが嫌いでも、彼がそばにいる限り、
「モカ…」
「はい？」

あなたは私のモノだから

番外編・初めての夜（後書き）

誤字・感想等受け付けます。

１０話⇒８日（２１時）

新連載⇒１月下旬（詳細は後日）

１０・私に触れたのは（前書き）

モカ⇒神谷⇒モカ視点になってます。
なんかまとまりのない文章になってしまいました…

１０・私に触れたのは

俺の部屋にきた島田は、
「なんで陛下が倒れたの？誰の仕業？」
非番だったため聞いてきたが、俺が知るわけもなく…。
毒を盛られたのか、暴行を受けたのかも分からない。
「島田がやったと思ったんだが…。犯人捜しは今度だ」
部屋から追いだそうとすると、
「さっきの執事は？」
「神谷さん。昔、姫の執事をやっていた方だ。
少しの間業務を代わっていただいた。補助をやってもらう」
「…いいの？」
「何がだ？」
「澪様、取られちゃうかもよ？」

僕の言ったことを信じたのか、姫様は何度も聞き返した。
真実は謎だが、そういう誤解を招くことをした方が悪い。
頭を撫でようとすると、それを手で払った。
「１人にさせて」
その願いには応じたかったが、もうすぐしたらモカ君がここに来る。
修羅場になる様子が見たかった。どんな風に言い訳をするのか…。
君には、王子様の地位は似合わない。

ガチャッ
「姫、お目覚めに…」
普段だったら寝ている姫がいるのだが、そこには、
すすり泣く姫と、少し離れたとこに神谷さんがいる。
何でいるんだ？と思いながら神谷さんに視線を送ると、気付き、
「事情は姫様から聞くといい」

俺は姫のそばに寄り、
「姫…？どうかなされましたか？」
ただ泣き続け、俺を見ようともしない。
「姫…」
「夜、メイドと会ってるって本当？」
「？…誰が言ったんですか？」
「い、言えないけど」
俺はすぐに分かった。そこにいる神谷さんだと。
あの人は姫に惚れている。交代したのも、俺から姫を奪うため。
「仕事の話ですよ。もしご不満なら、毎晩姫の隣で寝ます」
「…モカ」
両手を広げると、姫がゆっくりと収まる。
大丈夫と耳元で言ったら、何度も頷く姫。
いつの間にか神谷さんは部屋から出ていた。

「仁が私のことが好き？」
「ええ」
「…昔は好きだったわ。でも、勝手にどっか行っちゃった…」
姫は自分が捨てられたと思ったんだ。
今になって神谷さんに気持ちに気付かなかったことを後悔しているようで。
「だけど、モカが1番よ！」
「…ありがとうございます」
触れるだけのキスをし、頭と頬を撫でる。
「でもね、嫌な予感がするの…」

１０・私に触れたのは（後書き）

次話⇒１０日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

１１・私の顔についた血（前書き）

今回は短めです。

11・私の顔についた血

今日の目覚めは悪かった。
人の悲鳴で目覚めたからだ。

神谷さんが言った誤解はなくなり、執事の業務に戻った。
そして次の日の朝。
俺の腕を枕にして眠る姫。
部屋の前の廊下ではメイドたちが、
何か喋りながらどっかへ走って行く。
俺は姫を起こさぬように、スーツに着替え、姫の部屋を出た。
すると、結城さんが立っていた。
「どうかしたんですか？」
「…陛下が殺された」
「！？」
陛下は昨日の夕方病院で目覚め、夜に帰って来たのだが…。
驚く表情を出さず、陛下がいる屋敷へ向かった。

メイドや手伝いの集団の真ん中に、
バスローブ姿で血だらけの陛下が仰向けで倒れていた。
首から腹部にかけて斬られており、臓器が見れないぐらいの深さ。
血が流れまだ痙攣しているところを見ると、さっき殺されたのかも
しれない。
俺は自然と島田を探したが、この一室にはいなかった。
そして、あの人の姿も。
「……神谷さん」
「…やっぱあいつか」
「ええ」
結城さんは腕を組み、目を閉じて大きく溜息を吐く。

数分後に救急車が到着したが、運搬中で息をひきとったらしい。
「お、お父さんが…」
動揺を隠しきれない姫は、俺の胸元に顔を当てる。
そっと抱きしめて落ち着かせる。
ガチャ
結城さんが部屋に入ってきた。
「神谷さんは？」
「いないな…。自室には荷物があるんだが」
「…」
俺は姫に陛下が亡くなったことを伝えたと同時に、
神谷さんが犯人かもしれないと伝えた。姫は疑わなかった。
「つらいのは分かりますが、泣かないで下さい」
ゆっくり俺から離れ、首を上下に振る。
「外に逃げたか、この屋敷にいるか…ところでお嬢様」
「？」
結城さんは姫を指す。
「なんでお嬢様の顔に血が付いてるんだ？」

１１・私の顔についた血（後書き）

次話⇒１２日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

番外編はどうでしたでしょうか？
また話が楽しく読める（？）ような番外編を書きたいと思います。

１２・私を残してあなたは消える（前書き）

まさかのカミングアウト回です。

１２・私を残してあなたは消える

「！？」
血がついてる部分を手で隠し、そっぽを向く姫。
姫には陛下を殺すアリバイがない。だとしたら…。

テレビをつけると速報で陛下が殺されたニュースが流れる。
屋敷には報道陣が押し寄せ、メイドや護衛たちが対処する。
結城さんも手伝い、部屋には俺と姫だけになった。
「私がいない時、誰か来ましたか？」
「…」
「神谷さんですか？」
姫はコクリと首を動かす。
あいつは陛下を殺したあと、俺と入れ違いに部屋に来て、
姫に血痕を残して去って行った。
「モカ…聞いてほしいことがあるの」
「何でしょう？」
「あの…」

姫が話す内容は、無知の俺にとっては衝撃的だった。
もっと天皇一族をちゃんと調べるべきだったと…。
「モカは分かるでしょ？私にはお母さんがいない。
１０年前に仁によって殺されたの」
「！？」
「犯人が仁ってバレてないの…。私だけが知ってる。
前もこんな感じに血をつけてどっか行ったから」
「…なんでそれを警察に言わないんですか？」
「言ったら私が殺されるわ！…それに、簡単に捕まらないと思う」
「え？」

「だって仁は…殺し屋だもの」
！？
その時の俺を見る目が、冷たく感じた。
神谷さんは俺と似た感じで、元々陛下を殺すために姫の執事になった殺し屋。
姫に恋をし、任務を忘れ、ずっとここにいようとした。
そんなある日、姫の母である王妃が、神谷さんを好きになってしまった。
それを知った陛下は、神谷さんを屋敷から追い出そうとした。
融通は利かず、神谷さんは腹癒せに王妃を殺し、姫に告げ、去って行った。
証拠は残さないところを見ると、相当な手慣れかもしれない。
「仁はお父さんにモカと役目を代わってくれって頼んで、ダメだったから殺したって…。
次はモカが殺されるわ！…逃げて！」
「…」
「人殺しが怖い…何もしてないのに…、なんで殺すの？」
姫が俺に抱きつく。頬についた血は、涙で消えかけていた。
「私は死にませんよ。だって…、人殺しですから」

１２・私を残してあなたは消える（後書き）

次話⇒１４日（２１時）
誤字・感想等受け付けます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2488z/

姫の気まぐれ

2012年1月12日21時56分発行